

2012年11月14日

千代田区 区長 石川雅己 殿
千代田区教育委員会 教育長 山崎芳明 殿
千代田区教育委員会 委員長 中川典子 殿
千代田区立九段小学校・九段幼稚園 校長・園長 鈴木邦夫 殿
九段小学校幼稚園施設整備検討協議会 会長 田中康博 殿 委員各位

一般社団法人 日本建築学会
関東支部長 安達俊夫

千代田区立九段小学校校舎の保存・活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

日頃より、本会の活動につきましては、多大なご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。

さて、貴下におかれましては、現在の九段小学校・幼稚園校舎の整備について検討するため「九段小学校・幼稚園施設設備検討協議会」を設置し、その整備方法について広く意見を募りつつ検討を進めておられることなど、貴区のホームページにて拝見しております。

ご存知のように、現在の九段小学校・幼稚園の校舎は、関東大震災で焼失した117校の公立小学校を東京市がその震災復興事業としてすべて鉄筋コンクリート造で建設した「復興小学校」の一つ「上六小学校」として1926（大正15）年に竣工したものであり、その歴史的価値は、本会において戦前に建てられた価値ある建築物をまとめた『日本近代建築総覧』においても「特に価値が高い」と評価されています。

建物の歴史的価値については、別紙「見解」に示しました通り、関東大震災後に建てられた「復興小学校」の数少ない貴重な校舎でありかつ千代田区に現存する唯一の校舎であることとともに、初期の復興小学校を代表する特に優れた意匠の校舎であるという点で極めて貴重と言えます。

東京市の復興小学校は、児童の「安全性」と「健康」、また震災の教訓から建物の耐震性や防災・避難についても十分に配慮した設計がされており、これらの工夫は現在においても有効なものが多いと言えます。現在の校舎には当初からの変更点がいくつか認められますが、適切な改修を施すことで現代の建築にはない豊かな空間を甦らせることが十分に可能であり、建物の価値としては登録有形文化財（建造物）にふさわしい価値（再現することが容易でないもの）を備えていると言えます。

貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ歴史的価値についてあらためてご理解いただき、整備計画においてはこのかけがえのない文化遺産の価値を最大限に考慮した保存改修をご検討下さいますよう、格別のご配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、日本建築学会関東支部といたしましては、この建物の保存・活用に関してできる限りのご協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具

2012年11月14日

千代田区立九段小学校校舎についての見解

一般社団法人 日本建築学会関東支部
建築歴史・意匠専門研究委員会
主査 海老澤 模奈人

東京都千代田区三番町16に建つ千代田区立九段小学校・幼稚園の校舎は、関東大震災で焼失した117校の公立小学校を東京市が震災復興事業としてすべて鉄筋コンクリート造で建設した「復興小学校」の一つ「上六小学校」の校舎として、学級数は18学級、構造形式は鉄筋コンクリート造地上3階・地下1階建て、延床面積は1,214.91坪という、復興小学校としては比較的小規模なタイプの校舎として1926(大正15)年8月30日に竣工した。設計は東京市学校建設課が担当し、施工は石井権三が請け負った。敷地は東西に細長い矩形の整った形状で南側に広く運動場を確保し、日照に配慮して3階建ての教室棟を敷地の西辺と北辺に沿うようにL字型に配置している。当初は敷地の東辺に沿って平家の講堂兼屋内体操場を設け、全体を「コの字」平面としていたが、この部分は現在、新しい体育館に改築されている。敷地は南側を11m幅員の道路、東側を4m幅員の道路に接しており、西側は東郷元帥記念公園(旧上六公園)に、北側は高い崖を挟んで民家の敷地と隣接している。

千代田区立九段小学校校舎の建築史的価値としては、大きく以下の2点を指摘できる。

1. 千代田区に現存する唯一の復興小学校の校舎であることの貴重性

東京市の復興小学校では117校すべてに強固な鉄筋コンクリート造が採用され、また大勢の児童が同時に移動する階段・廊下の幅を広く取るなど、児童の「安全性」に最大限に配慮して設計された。また、片廊下式の平面形式により普通教室の通風や廊下の採光を改善しつつ校舎の幅を抑え、それを敷地に沿って配することで狭い敷地内に屋外運動場を確保した。他にも高い天井高による良好な自然換気、大きいガラス窓による採光の改善など、児童の健康を最優先した設計上の工夫が数多く試みられている。こうした工夫は共通の“設計規格”としてすべての復興小学校に適用され、いずれも九段小学校の校舎にも適用されている。

現在、こうした復興小学校の校舎を現役で使っている小学校はわずか7校(他に台東区に黒門小、東浅草小(旧待乳山小)、中央区に常盤小、泰明小、阪本小、城東小(旧京橋昭和小)がある)であり、千代田区にはかつて15校(旧麹町区:2校、旧神田区:13校)の復興小学校があったが、現在では九段小学校を残すのみとなっている。

以上のように、九段小学校の校舎は優れた設計内容を持つ東京市の復興小学校の一つであり、その千代田区唯一の現役校舎という点で、高い建築史的価値を備えているとすることができる。

2. 「初期型」の優れた意匠の復興小学校校舎である

校舎の正面は東郷公園に面する側で、ここでは3階の窓に大正末期～昭和初期に登場した表現主義的な放物アーチを用いつつ、建物の中央に昇降口、その両脇に階段室をそれぞれ配し、両翼部の外壁をやや前に出すことでファサードを左右対称に整えた格式重視のデザインとしている。一方、校庭に面する南向き校舎では時計台を端部に設けることで横長3階建ての形態をより強調し、3階窓に表現主義的な放物アーチの窓を並べることで外観立面をリズムカルにまとめ上げている。このように、九段小学校の校舎は二つの立面に同じ表現主義的なモチーフを用いながら、それぞれの役割にふさわしいデザインを与えた点が優れた意匠として評価できる。

また、九段小学校の校舎は復興小学校の中でも初年度に着工した「初期型」に特徴的に見られる意匠上の特徴の一つ、具体的には「廊下側の窓の床上高さが教室と同じ750mm」という特徴を備えている（後の設計規格では廊下窓の床上高さが1,200mmに変更された）。この寸法により廊下は窓が大きく開放的で明るい空間となり、さらに屋外運動場に面するL字型の立面では内部に関係なく窓の高さを一様に揃えて外観デザインをまとめることに成功している。こうした初期型の特徴を備え、かつ表現主義的なモチーフを駆使し、さらにファサードに左右対称の格式表現を試みたデザイン密度の高い初期型の校舎としては、他に明石小学校（中央区・2010年解体）や明正小学校（中央区・2012年解体）があったが、現在では九段小学校を残すのみとなっている。このように、九段小学校の校舎は「初期型」の優れた意匠の復興小学校の校舎という点で、極めて高い建築史的価値を備えていると言える。

■ 建物写真



1. 昭和 26 年頃の九段小学校全景（同窓会 HP より転載）



2. 校庭側立面：窓高が統一された立面（右校舎：普通教室、左校舎：廊下）撮影：山崎鯛介



3. 東郷公園側立面：昇降口の中央配置と翼部の強調による左右対称の表現 撮影：山崎鯛介



4. 放物アーチ型窓（二重アーチ）撮影：同前



5. 廊下内部（窓台高さが低い）撮影：同前